

医療機器のスペシャリスト

命を支えるエンジニア

臨床工学技士をご存知ですか？

友人などに仕事のことを聞かれ、「臨床工学技士をやっている」と言っても知られていないというのが現状です。そこで今回は、臨床工学技士について私の経験を含めて皆様にご紹介させていただきたいと思います。

臨床工学技士は国家資格です。

1987年に制定され、医師の指示のもと、生命を支える機器を中心とした操作・保守管理を行い、医学と工学の知識をもとに医療機器のスペシャリストとして患者様の診療のサポートを行なっています。病院での略称はME (Medical Engineer)、もしくはCE (Clinical Engineer)です。

患者様と向き合う

私は臨床工学技士になって10年目です。仕事内容は多岐にわたりますが、当院では21名の臨床工学技士が透視センター、手術室、心臓カテーテル検査室、機器管理室の各場所に分かれて仕事をこなしています。

最初に透視センターの担当となり、血液浄化業務に携わりました。社会人として、また医療人として先輩や先生、看護師、そして患者様から様々なことを学びました。一番印象的だったのは透視患者様に初めて針を刺し

た時に、「ありがとう。この治療のおかげで生きていられる。」と言われたことです。その一言は自分の仕事の重さを再認識させるものでした。

その次は手術室の担当となり、主に人工心肺装置と言われる機器の操作を行ないました。これは、心臓手術などの際に患者様の心臓と肺の代わりをする機器で、安全に手術が行なわれるために心臓外科医、麻酔科医、看護師と連携をはかり操作を行います。

病院には医療機器が数多くありますが、私たちの携わる医療機器は特に患者様の生命に直結するものが多く、今でも毎日気を引き締め直しています。

余談ですが、医療系ドラマなどで心電図モニターや人工呼吸器などの医療機器が映し出されると、必ずどのメーカーの何であるかをチェックして同僚と話の種にするというのは私たちの職業病かもしれません。

さて、本題に戻りますが機器管理室の担当では、人工呼吸器という患者様の呼吸を補助する機器が正常に動作しているかのチェックを毎日行ないました。使用後は次も安全に使用できるように点検・整備も行ないます。自宅で人工呼吸器を使われる



機器管理室にて。医療機器の安全確保と有効性維持の担い手としてチーム医療に貢献しています。

患者様の導入のサポートにも携わりました。また、ペースメーカーとつながる脈が遅くなった患者様に使用する機器の定期的な外来でのチェックを行ないました。ここでは、人工呼吸器を装着し言葉が話せない患者様から外来でお話ができる患者様など、コミュニケーションの奥深さを学びました。

そして現在は心臓カテーテル検査室の担当です。循環器内科の先生を中心に看護師と共に働き、心電図や血圧の記録、心臓の血管内超音波装置の操作等を行なっています。場合によっては患者様の心臓や肺の機能

を補助する機器の操作、管理も行ないます。

検査室という名称ですが、心臓に酸素と栄養を送る血管が詰まってしまう病気(「心筋梗塞」がその代表です)の患者様に、治療を行なう手術室でもあるのです。夜間や休日に呼ばれることも多く大変ではありますが、重症の救急患者様の治療に関わるといふことで、やりがいを持って取り組んでいます。

安全第一

私たち臨床工学技士は、医療機器を通じて患者様と向き合い仕事をしています。病院には医療機器が数多くあり日々進歩する医療現場において、高度医療機器は必要不可欠となっています。そのため私たちは医療機器を安全に、円滑に使用できるように日々点検、管理を行なっています。

医療機器が問題なく使用できることが、現代の高度医療を支える要になると信じています。比較的新しい資格のためご存知の方が少ないかと思いますが、このコラムを期に覚えていただけたら幸いです。今後も、患者様に安全で安心できる医療を提供するための一翼になるよう頑張っていきたいと思えます。

自治医科大学附属病院 臨床工学部
臨床工学技士 鳥越 祐子
とりこえ ゆうこ